〔仏教の美術展によせて〕

ガンダーラの光背文様

仏像の像背には、仏身の四辺に一丈の光があることを示すものとして、挙身光（尊像の全身を囲む）、頭光（頭の光背）、身光（体部の光背）が伴われ、総称して光背と呼んでいます。光の相（丈光相）を表わしたものですから「光」の形状に表わすのが古いと考えられ、ガンダーラの頭光には、それが残っています（図１）。この像は青銅製の如来坐像で、頭光は星形のギザギザの輪郭線で形取っています。目を見開き、口髭をつけた風貌はローマ風です。異様に大きくて高い、束髪のように表わされた肉髻部を持っています。西方の作家によって、自らを太陽神になぞらえたローマの暴君ネロの若かりし頃の肖像彫刻に由来しているとの説も出ているほどです。1～3世紀説があります。同じクシャン王朝時代のカニシュカ王のコインに刻印されたギリシャの太陽神ヘリオスに、これと同じような頭光がついていますので、ローマを介してのギリシャの影響でありましょう。イランの神像の上にも見えています。

1 青銅如来坐像

ネロ云々の正否はともかく、この頭光はガンダーラ中でも異色です。石彫像の頭光は、初期は無文の円板形でしたが、後には、光相と関連するものとして、長い放射線状の文様や、鋸歯文状の長い歯の一つ一つに中心線を入れた文様が現われ、後者は蓮華文の変形とも見られる中間的なものです。有名なカニシュカの舎利容器と言われて来た銅製容器の頂上を飾る如来坐像（図２）も蓮華文の頭光で、図１のような頭光はこのような形から生まれたとの説もありますが、如何でしょうか？　石彫ではジグザグに輪郭を形どる手間と、形状保存の難しさを考えてか、放光形は、円板上に浮彫りしています。

後の青銅仏に際立った光背を持つものが現われました（図３）。頭光・身光を合わせた挙身光を持つのも珍しく、その周辺に、極めて装飾的な突起文をつけています。突起部分は立体感があり、頂上部の三葉形と、その下の下方が張んだ瓶形のもの、更にその下の二つあるいは一つの円形より成ってい

2 青銅如来坐像

3 青銅如来立像

ます。このような複雑な形は石ではなく、銅という材質によってこそ可能なものでありましょうが、透し彫り風の技巧を凝らした華やかな作風に目を奪われます。これは火焔説もありますが、火焔のようなゆらめくものよりも、強く煌めいて放たれた一丈の光の表現に相応しいと思われます。火焔光背はガンダーラには殆んど見られずアフガニスタンに始まっています。本像の制作は５～６世紀と言われ、類品は数点伝えられています。ガンダーラの末期、むしろ塑像が発達した時期のこれらの像は、ギリシャの太陽神以来の放光のイメージが、その時代まで強く支持されていたことを物語りましょう。同様の光背が、ハッダやフォンドキスターン、パーミヤーンなどに見られます。

そして、この華やかな突起文は石彫像の円板上にも浮彫りの手法で踏襲され、大部に簡略化され、磨滅もしていますが、その中には、この突起文と、先述の放射光の線状文を交互に配した一例があります。このことは、何よりも、この突起文が放射光線と同じく放光を表わすと考えられた証拠ではないでしょうか。

さて、これらの突起文頭光の中には、青銅仏にも石像にも、突起

4 石造如来立像

文帯の更に内側に浮彫りの葉状文を巡らせている例があります。図３は実は、その例です。葉状文は既に、もっと以前のガンダーラ盛期の石造の円板形頭光に見えています（図４）ので、ここでは、突起文に、以前からの葉状文を合わせているのです。この文様は頭光のみでなく、仏像の台座の飾りや、花綱を持つ童子の図柄を縁取る飾りとして、また、ステューパの周縁を巡って、いずれも帯状に浮彫りされています。ガンダーラ美術には供養者が手にしたり、また、仏伝中に描かれた種々の聖樹があります。その中に、これとよく似た葉を持つものもありますが、頭光のこの文様は月桂樹を表わすという説が出ています。ギリシャの競技優勝者を始めとする様々の勝者（国王、神々）の頭上に輪の形にして掲げられた月桂樹のイメージは、頭光の縁を円形に巡ることと合致するようでもあります。

以上のように、ガンダーラ仏の頭光の種々相は、光の表現から聖樹の表現へと大きく振幅し、両者が混合されてもいます。そこには信仰者の自由自在な考えが垣間見られ、その後の中国以東で、ほぼ火焔光背一辺倒になって行くのとは異なっています。　（村田靖子）

季刊 美のたより №119
平成９年５月22日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.